〈青森県史〉の窓 31

蝦夷地へと続く道

―松前街道―

石塚雄士
（青森県青少年・男女共同参画課）

かつて外ヶ浜と呼ばれた青森市から津軽半島の陸奥湾沿岸にかけて、国道280号線が通っている。この280号線は通常、青森市内の国道7号線との分岐を起点として陸奥湾沿いを北上し、旧三厩村を終点にすると思われている。しかし、正式な終点はその先、津軽海峡を渡った函館市なのである。もっとも、以前三厩と北海道の福島町を結んでいたフェリーの航路は現在休止しており、北海道内については国道228号線と重複しているため、280号線が本州と北海道を結ぶ国道であることに普段気が付くことはない。

現在はあまり目立たないこの道路であるが、江戸時代には奥州街道の末端部分として、とくに松前街道、または上磯街道や外浜道などと呼ばれ、蝦夷地へと往来する人々でにぎわう街道であった。

旧松前街道に残る松並木（昭和43年4月15日）／県史編さんグループ所蔵

さて、この松前街道は、当時蝦夷地と呼ばれていた北海道に存在した唯一の藩、松前藩の藩主が江戸に参勤交代する際に通過していた街道である。江戸から道中22の宿場に逗留しながら北上してきた藩主一行は、青森から松前街道に入り、途中平舘に宿泊した後、三厩から乗船して城のある松前を目指したのだった。

さらに、江戸時代も後半にさしかかり、ロシアの勢力が蝦夷地へと接近してくると、北方警備のために、蝦夷地に向かう幕府の役人や諸藩の兵士たちが、大勢松前街道を往復するようになる。特に蝦夷地が寛政11年（1799）から一時幕領化されると、いよいよ幕府の役人などの往来が盛んになった。

藩主や幕府の役人が往来する時には、上磯地方の村から助郷役として人馬が徴発された。一例として、天保元年（1830）に松前藩主が参勤交代した際には、三厩から宇鉄（現在の外ヶ浜町内）の間に50人もの人夫が動員され、70匹以上の馬が物資運搬のために徴発されている。しかし、上磯地方は人口が少なかったことから、農繁期などには人手不足が生ずるなど、その負担は街道沿いの村々に重くのしかかっていた。

蝦夷地を目指したのは役人や兵士たちだけではなかった。松前街道沿いの外ヶ浜地域をはじめとする北東北の町人や百姓などの庶民たちも、出稼ぎなどのために蝦夷地を目指し、松前街道を北上していったのである。その流れは幕末に箱館が開港される頃にはいっそう激しさを増した。弘前藩などでは、藩内の少なからぬ割合の民衆が出稼ぎに行ったまま家を空けていることが問題となり、蝦夷地への出稼ぎは、藩によって規制されるまでになっていたのである。

近代以降、蒸気船の発達などによって北海道への玄関口は青森へと移り、松前街道の賑わいは過去のものとなった。そして現在、往事の街道の姿を偲ばせるものは旧平舘村付近に残る松並木だけである。潮風に耐えて今も立ち続ける松を見上げると、様々な思いを抱いて蝦夷地を目指した人々の姿が浮かんではこないだろうか。